

冷たく固い物が秘部に押し当てられてきた時、麻美が瞳を閉じた。

「この子ったら、なに目をつぶってるのかしら」

「あぁっ！」

頬に鋭い音が弾け、じーんと跡を引くような痛みが走った。

思わず目を開くと、美佐子が薄笑いを浮かべた顔で麻美を見下ろしている。

「せっかく女にしてもらえるんだから、ちゃんと見とかないとダメじゃないの」

「だって……だって……」

「何がだってよ、ほら、見るのよ、一生に一度だけのことなんだから」

美佐子が麻美の顔を押し下げ、股間に向けた。

「そうそう、ちゃんと記念のビデオも撮っておいてあげなくっちゃね」

美佐子が麻美の前から離れると、平尾がバイブのスイッチを入れた。

「あぁっ！」

秘肉に押し当てられている作り物の亀頭がくねり、まだ開かれたことのない膣口を守るようにおおっていた小陰唇がめくれあがる。

「いや……いや、あぁっ、いやぁっ……」

敏感な処女肉にこすれる、固いシリコンの粘りつくような感触とモーターの細かな振動が秘部から全身に広がっていく。

麻美が無駄とは知りながらも必死で太股をよじる。

クスマー一つない繊細な桜色を保っている薄肉が、染みだした経血を潤滑剤にして、黒い陰具の先端でなぶられるその様は、淫らで、そして無慈悲なものだった。

「麻美、お前、感じてきてるんじゃないのかよ。ほら——」

平尾が膣口に押し当てたバイブをこじるように動かして離すと、経血で赤く染まった細い糸が秘肉と淫具の亀頭とを繋いだ。

「うそ……そんなの嘘……」

「へえ、そうかな」

平尾がバイブを押し進めてくる。

秘部の中心に重い圧迫感が広がり、引かれた大陰唇の上端で、包皮が中に秘めたクリトリスの形を浮き彫りにした。

平尾が薄皮ごと小粒な突起をつまみあげ、優しく押し潰すように愛撫しながら、バイブで膣口周囲をなぶりはじめる。

「くうんっ……！」

まだ自分でさえロクに触れたこともない過敏な突起を弄られるたびに、甘い苦痛にも似た快感が全身に広がっていく。

麻美は漏れようとする喘ぎ声を押さえつけ、強く唇を噛みしめる。

秘部が熱くなる、下腹が熱くなる、体全体が熱く火照っていく。

「ハハッ、ほら美佐子、ちゃんと写してやれよ、本格的に感じてきたみたいだぜ」

「へえ、どれどれ」

平尾の背後で、美佐子がビデオカメラをズームした。

「う、写さないで……。ダメえっ！」

思わず顔をあげた麻美に、美佐子が追い討ちをかける。

「何が、写さないでよ。麻美、貴女って可愛い顔してるクセに随分とヘンタイよね。縛られて、お乳に針を刺されて、お尻用のイヤらしい道具でちよつと弄られたら、すぐに感じて濡らすなんてさ」

平尾が愛撫しているクリトリスの包皮を完全に剥き下ろし、露出した瑠璃色の突起を弄りはじめる。

途端に太股がビクビクと痙攣し、まるで治り切っていない傷口に触れたような感触が股間を走り抜けた。

「ほらほら、可愛い突起が膨らんできたぞ」

平尾が陰具のスイッチをもう一ランクあげた。

「ああっ！ いや、イヤッ！ あううっ、ああんっ」

粘膜をこする陰具のくねりが大きくなり、細かな振動が加わる。

吐く息に熱いものが混じり、膣口から愛液がトロトロと溢れ出す。そのしたたりは経血と合わさって朱色の流れとなり、会陰部を通って、荒く乱れた息遣いに合せてヒクついている肛門を濡らしていく。

狂っちゃう……気が狂っちゃう。こんなの体がおかしくなっちゃう……。

秘部から生じ、体の奥底にまで染み透ってくる快楽は、それ以外のものを全て忘却の彼方に押しやってしまうほど激しく深いものだった。

——そしてその肉の快楽をよりいっそう助長するものは、乳首と乳房を縫う針の苦痛であり、自分は今、縛りあげられ、淫らな器具によって無理矢理に処女を奪われようとしているのだから、う自覚と、その惨めさだった。

麻美が頭を激しく振り、血が滲むぐらいに強く唇を噛みしめ、両手を固く握る。

脳裏に、先ほどの美佐子の言葉が蘇ってくる。

『麻美、貴女って可愛い顔してるクセに随分とヘンタイよね』
違っ、違っ、違っ！ 心の中で叫ぶ。

『縛られて』『お乳に針を刺されて』『お尻用のイヤらしい道具で』

麻美がすすり泣く。

秘部からの快感が激しさを増し、針で貫かれている二つの乳首と、弄られているクリトリスが痛いほど固く尖っているのが分かる。

美佐子の言葉が更に麻美を追い詰める。

『ちよっと弄られたら、すぐに感じて濡らすなんて』

イヤッ！ わたしは、わたしは、わたしは……。

脳裏が快楽の蜜の甘さに満たされ、甘美で淫らな味わいに染めあげられた。瞬間、麻美の視野は白銀の光に彩られ、背骨を突き通って走り抜けた快楽の大波が、唇から絶頂の叫びとなつてほとばしった。

*

「ああんっ!!!」

平尾の目の前で麻美が体を引き攣らせ、広げた太股の付け根がギュッと収縮した。

「どうやらイッたみたいだな」

麻美の秘部は絶頂の余韻にヒクリヒクリと細かく震えており、赤く色付いた柔肉は染み出した愛液と経血によってぬめり、陰毛を貼りつけている。

「さあ麻美、いよいよ本番だ」

平尾が、スイッチを切ったバイブレーターの先端で、充血した小陰唇を掻き分けて、奥の膣口に淫具の亀頭を浅く埋めこんだ。

「ああっ……ゆるして……」

唾液で濡れた唇から零れた麻美の声は、初めて他人によって味わされた絶頂の名残を色濃く留めており、そのどこかねだるような口調が、平尾の欲情を更に掻き立てていく。

「一度イッただけはあるな、この穴けっこう緩んできてるな」

スイッチを入れたバイブが、膣口周囲の愛液まみれの薄肉をめぐりあげてくねり、ニチャニチャと湿った音をたてながら奥の窄まりをほぐしはじめる。

「ううっ……。あつ、ま、また……」

麻美の零す息が快楽の調子を帯び、内腿に再び緊張が走った。

平尾がバイブを押し進める。

シリコン製の陰具が処女の肉を押し広げていく時の、粘りつくような抵抗を感じる。

「クッ！ うっ、ああんっ……！」

モーターの音がくぐもつたものに変わり、バイブの亀頭が半ば膣口に埋まる。周囲の肉が盛り上がり、小陰唇が押し分けられる。

平尾がバイブを強く突きあげた。

「あぐうっ」

細い首を反り返して麻美が悲痛な叫びをあげた。同時に、何かをブツリと断ち切った時のような感触が手に伝わってきた。

肛門用の淫具を、その全長の半分ほどまでを埋めこまれた秘部から、破瓜の血がしたたる。その朱色は経血よりも赤く秘部を染めあげ、股間を汚していく。

「うううっ……ひ……酷い……酷すぎる……」

すすり泣く麻美の瞳から涙が溢れ、まだ絶頂の余韻に火照っている頬を濡らした。

「なにを言ってるやがる、本当に酷いことをされるのは、まだこれからなんだよ」

平尾がバイブを一気に深く、根元まで突き入れた。

「美佐子、さっきのケースの中に針と一緒に糸が入ってただろ」

平尾の声に、麻美の破瓜の瞬間を撮影していた美佐子が、ビデオカメラから顔をあげた。

「糸って何をやるの？」

「縫ってやるんだよ、バイブを咥えさせたまま、麻美の『ここ』をな」

美佐子が一瞬咄然とした表情を浮かべるが、すぐにそれは残酷な笑みとなって唇を歪めた。

「分かったわ、用意するわ」

「い、嫌っ！ そんな……そんなこと、そんなことされたら、わたし、わたし、死んじやう、死んじやうよ！」

「何を言っているんだよ、死ぬわけないだろう。女のアソコってのは、出産のときに裂けたりするんだからな」

必死に訴えてくる麻美に平尾が楽しげな口調で言い、バイブを更に深く埋めこんでいく。

「あううっ……！」

麻美が再び苦痛の声をあげ、膣から溢れ出した血が椅子を伝い、床にしたたり落ちた。

その隣では、美佐子が、小箱から新たに取り出した縫針にプラスチック製の細い釣り糸を通している。

平尾がくねり続けるバイブの尻を指で押し、肛門用の淫具を完全に麻美の秘部に埋めこむと、こじ開けられたばかりの膣口が電源コードを垂らした状態でじわりと窄まった。

バイブのスイッチを切り、美佐子の差し出してきた縫針を受け取る。

「イヤアッ！」

恐怖の叫びをあげた麻美の目が、鋭く銀色に輝く縫針を見つめてきた。

「お願い！ お願いです、お願いですから、やめて、やめてっ！」

必死に哀願する麻美の股間に、針を持った平尾が屈みこんだ。

「あぁっ！ い、イヤッ！」

麻美の叫びが甲高い悲鳴となった。

「ヒイツ！ い、痛いっ！」

平尾が、膣口を取り囲む小陰唇の片方に突き通し、かすかに血を滲ませる傷口に糸を通していく。

「許して、もうヤメテ！ お願い、イヤッ！ あぁっ、痛いっ……！」

懇願し、泣き叫ぶ麻美の声を聞き、苦痛に痙攣する股間を見つめる平尾の唇の端から、一筋の涎が垂れ落ちる。

「ほら、通ったぞ。もう片方だ、もう片方もこうやって——」

反対側の小陰唇にも針を突き通し、血に濡れた糸が二枚の薄肉を結びつける。

平尾は針を三度往復させた後、糸を結び合せ、中にバイブを啜えこんだままの膣口を、血にまみれた小陰唇でおおって塞いだ。

そんな陰惨な作業が終わった時、麻美は、精も根も尽き果ててしまったように、ぐったりと椅子に体を倒した。

平尾が立ちあがり、後ろの美佐子に振り返る。

「ちゃんと撮っただろうな？」

「ええ。その子の泣き顔もちゃんとね」

美佐子がビデオカメラから顔をあげて答えた。

「でもさ、変な気分になってきちゃったわ。その子のされてること見て、悲鳴聞いてたら、もう我慢できないぐらいになってきちゃった……」

「ハハッ、なに言ってるんだよ、さっき満足させてやっただろが」

「ねえ、シテよ。こんな気分のままだったら、わたし……」

美佐子がスカートの中で太股を縫り合わせ、危険なほどの欲情でギラついている瞳を向けてくる。

「そうか、じゃあな、俺が次の用意をするあいだ、麻美に楽しませてもらいなよ」

「えっ？ だって、どうやって……」

「縛りつけてはいるけど、こいつも舌ぐらいは使えるんじゃないのか」

「それは……うふふっ……ずいぶんと楽しそうね」

「だろ、ペットにするなら女の悦ばせ方も教えておかなくっちゃな」

「そうね、そのとおりだわ」

美佐子がビデオカメラから離れ、椅子の上でぐったりとしている麻美の顔をつかんで起した。
「じゃあ、たっぷり楽しみな」

頷きで応えた美佐子を残して、平尾がバスルームに向かった。

洗面所の水道の蛇口をひねった時、隣の部屋から麻美と美佐子の声が聞こえてきた。

「そんなことできません、できないです……!」

「できないわけじゃないでしょう、同じ女なんだから、どこを舐められたら感じるか、ちゃんと分かるはずよね」

「そうじゃなくて……そんな……そんな汚いことなんて……」

平手が頬を打つ時の甲高い音と、麻美の悲鳴。

「ああっ……。叩かないで、叩かないで……」

「よくも汚いなんて言ってくれたわね。だったらその舌で綺麗にしないよ、平尾先生が出してくれた精液も、まだたっぷり中に残ってるはずだしね」

「そ、そんな……」

「まだ嫌だって言うの。だったら仕方ないわね、先生に縫ってもらった貴女のここ、また針で虐めてあげましょうか？ この可愛いクリトリスを無茶苦茶にしてあげようか？」

「い、イヤ！ それはイヤッ!」

「さあ、ほら、良く見なさいよ。この針よ、この針を貴女の一番敏感なところに突き刺さしてやるわ、何度も何度も、貴女が素直なペットになるまで、何度も刺してやるわ」

「ああっ、ダメ、ダメッ! お願い、イヤッー!」

麻美の絶叫が部屋に響き渡り、そこに美佐子の笑い声が重なる。

「うふふっ……凄声。大げさね、まだ半分ぐらいしか刺さってないじゃない、ほら、ちゃんと突き通してあげるわよ」

「し、し……します、しますから、言う通りにしますから……」

「あら、どうしてくれるって言うの?」

「舐めます……舐めて綺麗にしますから……」

「そうなの、だったらお願いしようかしら」

美佐子がパンティを下ろしているのだろう、衣擦れの音と、椅子が軋む音。

「ほら、早くしなさいよ、ちゃんと舌はどくでしよう」

「うっ……。そうよ、舐めるのよ、ああっ……。もっと動かすのよ、もっと舌を使って……。あつ、そう、そこをもっと舐めるの、ああっ……。中もよ、中に舌を入れるの! あううっ、深くよ……。もっと深く! ああつ、顔をこうやって、もっと押しつけて——」

「うぐっ……。い……。息が……」

「あぁっ！ なにやってるの、舐めまわすのよ、中を思いっきり舐めまわすのよ！」
「ううっ、ぐっぐっ、ぐうう……ハアハア……く、苦し……い……」

「もつとよ、あぁっ……！ もつと舌の伸ばすのよ、もつと……あぁっ、舌をくねらせて、奥まで……子宮まで……あうっ、あううっ……！」

平尾が部屋に戻ってもまだ、美佐子のあげる快樂の声は続いていた。

彼女は、麻美を拘束した椅子の肘置きに片足を乗せて、もう片方の足は床についた姿勢を取っており、広げた太股の真ん中に両手でつかんだ麻美の顔を押しつけていた。めくれあがったスカートから覗いている裸の尻は肉の悦びにくねっている。

「ううっ、あっ！ あぁっ……」
「もうすぐよ、もうすぐ……！」

美佐子が切羽詰まった声をあげ、唇を秘部に塞がれて苦しげに喘ぐ麻美の頭を強く揺さぶりはじめる。

「あぁっ……！ ほら、もつとよ、もつと！ クッ！ あぁっ、い、イクッ……！」

絶頂を告げる声を絞り出した後、深い溜め息を吐くと、美佐子が麻美の顔を乱暴な手付きで引き離れた。

「ずいぶんと楽しんでたみたいじゃないか」

後ろから掛けた声に、美佐子が振り返ってくる。

「あら、戻ってたの。ダメよ、まだまだ舌の使い方がなってないわ」

「へえ、そうかい、でもそれにしちや凄声張りあげてたけどな」

「もう、バカ……。それよりもさ、用意はしてきたの？」

「ああ、ちゃんとな」

平尾が美佐子に見せた物、それは、彼の腕の太さほどもある浣腸器だった。既に中には透明な薬液が満たされている。

「せっかく初めて味わう浣腸なんだ、思い出に残るように、グリセリンは原液をそのまま使っちゃることにしたんだ」

「でも、それだったらキツすぎて、あんまり遊べないんじゃないの？」

「心配するなって、ちゃんと、こう言う物も用意してあるんだよ」

平尾が、紡錘形をした黒いゴム製の肛門栓を取り出す。

「うふふっ……。それならたっぷり楽しませてやれそうね」

「よし、早速はじめるとするか、撮影は頼んだぞ」

「ええ、分かったわ」

美佐子が背を向けてビデオカメラに向かうと、平尾が麻美に近づいていった。

口の中が粘っていた。

考えたくもない気味の悪い味、平尾先生の精液と、そして……。

またしても突きあがってきた空えずきに喉が震え、麻美は顔を起した。

「お願いです、口を濯がせてくだ——」

しかし、その言葉は、目の前に立っていた平尾の姿を見た途端に途切れた。

戻って来てたんだ……。

「何か言ったか？」

平尾がニヤつきながら問い掛けてくる。

「お口の中が気持ち悪くて……それで……」

麻美がようやく平尾の持つている流腸器に気付く。

最初は、それが何なのか分からなかった。聞いたことはあっても、実際には見たこともなかったガラス製の器具。そして、それはあまりにも大きすぎた。

「それって……？」

「知らないってことはないだろうが、お前の腹の中を綺麗に掃除してやる為のなんだ」

「掃除って……。じゃあ、やつぱり」

驚きと嫌悪感に、口の中の不快さが麻美の脳裏から消し飛ぶ。

「流腸は初めてだろう、だからほら、じっくりと我慢できるように、栓も用意してやったぞ」

平尾が見せた黒いゴム製の肛門栓から麻美は目を離せなかった。

「栓……？ だったら……」

—— だったら、わたしは今から流腸されて、お尻をあの栓で塞がれるんだ……。

麻美の瞳から涙が流れ落ちる。

「でもどうして？ どうして、わたしをそこまで虐めるんですか……？ 先生たちのこと、絶対言ったりしないって何度も言ってるのに……」

「ハハッ、可愛いこと訊いてくれるじゃないか。楽しいからだよ、お前みたいな女が苦しむくって、ウンチさせて下さいって泣くのをるのが楽しいからだよ——」

それに、と平尾が言葉を続けながら、麻美の涙を指で拭い取る。

「俺のモノを突っこんでやるところだからな、やつぱり綺麗にしとかなきゃな」

「えっ……？」

「肛門性交ってやつだよ。前を尻用のバイブで犯されたお前には、ぴったりの初体験だろうが」

「そ、そんな……！」

「ハハハッ、まだ流す涙が残ってたか。これから、その涙が涸れるまで、たっぷりなぶってやる

からな」

含み笑い混じりの声で言うと、平尾が太股を拘束しているビニールの紐を解きはじめた。

紐が外され、首輪から解放されると、麻美ははだけられていた服を掻きこみ、椅子の上で自分自身を抱しめるように体を窄める。

イヤ……浣腸されるなんてイヤ、お尻でサレるなんて、絶対にイヤ……。

「何をしてんだ、早く椅子から下りて、床にはいつくぼるんだよ。浣腸してもらいやすいようにな」

麻美が声をあげることもできず、何度も小さく首を振る。

「お前もバカな女だな、ここまでのことされといて、まだ分からないのか」

平尾が一旦浣腸器を床に置き、美佐子が操るビデオカメラの横に立ってかけてあるアタッシュケースの中から一振りの鞭を取り出した。

「ああっ！」

それを見た麻美が、許しを乞う暇もなく、平尾が鞭を振り下ろしてきた。

「ヒイツ！」

傷ついた乳房を守って竦めた腕に、何本にも分かれた細いなめし革が弾け、鋭い音を鳴らす。

「ほら、もう一度だ！」

引かれた鞭が再びヒュンと空を切り、今度はスカートから覗いている太股を打った。

「ああっ！ やめて、ヤメテっ！」

ビシッ！

鞭が頬をかすめ、肩に弾ける。

「イヤッ、イヤッ！ イヤッ！」

痛みよりも、鋭い音を鳴らして振り下ろされてくる鞭への脅えによって、麻美は絶叫し、泣き叫ぶ。

「そうだ、そうして、もっと椅子に座ってる！ お前の乳房を傷だらけにしてやる、真っ赤に腫れあがるまで打ち据えてやるからなっ！」

麻美が鞭を振るい続ける平尾を見る。そのスポンの股間の膨らみに気付いた時、鞭への脅えよりももっと強い恐怖が心に染みこんでくる。

先生は……この人は、わたしを鞭で叩いて興奮してる、感じてる、悦んでる……。

絶望が、彼女の心を真っ黒に塗りつぶしていく。

「下ります、下りますから、もう叩かないで……」

股間から伸びているバイブの線に繋がったコントロールドックスを慎重に持ちあげ、椅子から足を下ろす。だが、その瞬間、新たな苦痛が襲ってきた。

縫われた秘部の痛み——文字通り、肉が引き攣る苦痛に、麻美は床に座りこんでしまう。

「おいおい、どうしたんだ？」

「痛いんです、アソコが……とつても痛くて……」

「ハハッ、そりやそうだろう、そうでなきゃ拘束を解いたりするかよ。さあ、その邪魔な服を脱いで、裸になりな」

「えっ？」

「いいのか？ お前は今から浣腸されるんだ、もしそれ以上汚れてみな、着て帰れないぞ」

彼女にとってはある意味、体を包む服は最後の抛り所だった。だが、平尾の言う通り、もし汚い物で汚れてしまったら……。

麻美が制服を脱ぎはじめる。その手は小刻みに震えていた。

「ほう、あんな制服姿もなかなかだが、そんな丸裸の姿ってのも結構ソルな。よし、尻を向けて四つん這いになるんだ」

平尾が床に鞭を打ちつけた。響いた激しい音に麻美がビクンと体を竦ませる。

「ほら、手間を取らせるな！」

麻美の瞳が、また新しい涙に濡れた。

*

近づいた時、麻美の尻がキュと窄まった。

成熟と言うにはまだ一步足りない肉付きの尻たぶは、その狭間を固く閉じており、中に小型のバイブを埋められて、血と愛液に汚れている秘部は、外側の柔肉の端を辛うじて内腿の奥に覗かせているだけだ。

平尾が鞭を振りあげ、打ち据える。

「ヒイッ！ ど、どうして……？」

白い双丘を繋ぐように赤い線が引かれ、背中が反り返った。

「素直なペットつてのはな、後ろから見てもらう時は股を広げるもんなんだよ」

固く目を閉じて麻美が膝を床に滑らせると、二つに割れた双丘の奥に、くすんだ色をした小皺に囲まれた細い窄まりが覗いた。

「駄目だな」

「えっ？」

「もつと前屈みになって尻をあげるんだ、太股を腹につけるみたいにして広げてみな」

麻美の背中に垂らした鞭を、ゆっくりと尻に向けて這わせる。

「返事はどうしたんだ？」

「は……はい……」

命じられた通りに麻美が太股を広げて折りたたみ、下を向いた乳房が床につくほどに深く上半身を屈ませていく。

広がった内腿と秘部とが作り出す台形の頂点に、合わせ目からバイブのコードを垂らした柔肉がふっくらと盛りあがり、内側の残酷な処置をほどこされた小陰唇が押し出されてくる。その上では、肛門が、窄まりの奥に秘めた肉の輪の形までをハッキリと剥き出しにしていた。

「さつき動いた時に、またちよつと出血したみたいだな」

麻美の股間に手を差し入れ、秘部から垂れているコードを軽く引く。

「あぁっ！ 痛いっ……！」

ビクンと肛門が窄まり、同時に、膣穴の動きによって小さく引きあげられたコードに薄く血が滲んだ。

「面白い責め具だな、今、スイッチを入れてやったら、さて、どうなるかな？」

「や、やめて……！ そんなのこししないで……」

「だったら動くんじゃない」

平尾が、床から洗腸器を取りあげ、麻美の肛門に押しつけた。

*

「あっ……！」

お尻の穴に入ってきた固い物の感触に、思わず声が漏れた。

ガラスの管が奥に入ってくる。じわつと流れこんできた冷たい液体が浅いところに広がって、お尻の穴が勝手に窄まった。

「腹に力入れるんじゃないよ。薬が入ってかないだろうが」

「そんなこと言われても……」

「少しでも零してみる、何度でもやり直した。それとも、こうやって肛門を弄られるのが好きなのか？」

お尻の穴の中のガラス管が、内側をこすってぐるりとまわる。

「ううっ……！ い、いや……」

変な感じ……とつても変な感じ……変だよ、こんなのとつても変……。

今まで、触ったことも、触られたこともなかった所に感じる奇妙な異物感と、普通ではないイケナイことをされているんだと言う、妖しく背德的な思いが麻美の心に忍びこんでくる。

「あんっ！」

ガラス管が少し引かれ、再び入ってくる。

お尻の穴がまた勝手にキュとなって、固い異物を絞めつけるのが分かる。

「まだだな、まだ肛門に力が入ってるな」
視線を感じる。先生が、イヤらしく動いてるわたしのお尻の穴をじっと見てる視線を感じる。
ガラス管が何度も出し入れされ、そのたびに内側の浅いところをこすって、敏感なお肉を押し
広げてくる。

「ううっ……あぁっ……いや……いやっ……」

くり返されるそんな味わいによって、次第に麻美の息遣いが深くなり、尻たぶの狭間の奥の
から小さく舌打ちするような音が鳴りはじめた。

「尻の穴で感じやがって……」

平尾が含み笑い混じりの声で言った。

「そ、そんなこと——」

と、いきなり、強い圧迫感と共に冷たい物が流れこんできた。
驚きと薬液の勢いに、体が震える。

「おっと、動くなよ、吹管が折れて肛門の中に突き刺さっちゃうぞ」

「あぁっ……！」

体の震えを押えこだ麻美が、歯を食いしばった。

*

麻美が苦しげに体をよじりはじめたのは、半分ほどグリセリンを注腸した頃だった。

浣腸器を押す手に感じる抵抗が大きくなり、彼女が振り返ってくる。

「もういっぱいです……。苦しいの……。もう入らない……」

荒い息混じりの声で訴えてきた麻美の顔には、既に薄く汗が滲んでいた。

「なに言ってるんだ、まだ半分残ってるんだぞ」

「だけど、もう本当に、お腹が……」

「それを超えたら、少しは楽になるんだよ」

平尾が、内臓の抵抗を押えこむように、強くピストンを押した。

「あぁっ……あううっ……！」

注腸の苦痛に耐える麻美の全身から、冷たい汗が滲み出す。

「うぐっ！ あうううっ……！」

まるで後ろから見つめる平尾を楽しませるように、クネクネと尻がくねり、ガラスの吹管と肛
門の狭間から少量のグリセリンが滲み出してくる。

「零すなと言ったはずだぞ！」

「は、は……い」

麻美が息を詰め、必死で肛門を窄める。

平尾が更に手に力を加える。

「ぐうっ……！」

押し潰されるようなうめきを漏らし、鉤状に曲がった指がジリツと床をかきむしる。

次の瞬間、平尾の感じる抵抗感が薄れてピストンが大きく進んだ。

「ほら、言った通りだろう。直腸には一種の弁があつてな、それを過ぎると楽に入ってくんだよ」
一息つかせる為に一旦ピストンを止めると、平尾が再び吹管をえぐるように動かして、すっかりほぐれている肛門をなぶりはじめる。

「だめ……そんなことされたら……」

くすんだ色の小皺の奥から盛りあがってきた内側の湿った赤い肉が、ガラス管に掻きまわされるたびにクチュクチュと小さく音を鳴らす。

「あつ、あつ……で、出ちゃう……」

「この程度でか？ グリセリンが効きだしたら、こんなもんじゃないんだぞ」

「えっ？」

「まあ、もつとも、ちゃんと我慢できるようにはしてやるがな」

平尾が一気にピストンを押し進めた。

吹管を抜かれた麻美の肛門が深く収縮して、周囲の小皺が一つに寄り集まった。

だが、排泄の小さな蓄はすぐに広がって、ヒクヒクと震えはじめる。

「グリセリンが効いてきたみたいだな」

「はい……」

麻美が懸命に尻を引き絞ると、下腹が低く轟くような音を鳴らす。

「ああつ……行かせて、おトイレに行かせて下さい……」

「駄目だつてことは分かってるだろう。ここで汚い物を出したくなかったら、ほら、尻をあげるんだ」

麻美が嘆き声を漏らして腰を持ちあげると、平尾が高く掲げられた尻を片手で抱えこむようにしてつかみ、肛門栓を押しつけた。

「尻の力を抜くんだ。この栓は少しばかり太いからな、下手をするとお前の尻の穴、裂けちゃうぞ」

グツと強く肛門栓を押しつける。

「ああつ、無理！ そんなの無理です！」

「痛いか、そりやそうだろうな、こんなに小さくて繊細そうな尻の穴なんだ」

舌なめずりするような表情を浮かべ、平尾がゴム栓をまわしながらジリジリとねじこんでいく。

「ぐうっ……」

麻美がかすれた声を喉の奥から絞り出し、頭を強く振る。

押し広げられた肛肉が張り詰め、平尾の腕の中で尻が悶える。

「尻の穴を緩めな、このままじゃ本当に切れちゃう。まあ、それはそれで、また面白いけどな」
更に力をこめて、肛門栓を突き進める。

「ああっ」

麻美が絶叫し、深く押し下げられた肛門が遂に屈伏した。細い穴に挿入された太い異物によって、彼女の肛肉は張り裂ける寸前にまで張り詰めている。

「良かったな、裂けなかったじゃないか。結構、太いモノ出してるんじゃないのか」

「いやっ……!」

「ハハハッ、まあいい、後は少しは楽なはずだ」

平尾が再び肛門栓をねじこみ、その段が刻まれて括れている部分までを、尻穴に埋めこんだ。軽く引き、しっかりと固定されていることを確かめてから立ちあがる。

「よし、これでいい」

平尾が体を離れた途端、麻美の冷たい汗にまみれた体が床に倒れこんでいった。

以下、次回へ